浅間美哉の警告

「出雲荘は不純異性遊行為禁止ですっ！」

これを言うのも何度目だろうか、出雲荘の大家・浅間美哉は溜め息をついた。
目の前には佐橋皆人の布団に、セキレイである月海が恥ずかしそうに潜り込んでいた。
美哉がこれを見て怒ることは、「この出雲荘で破廉恥な行為をすることを禁ずる」という意味でだったが、最近ではそれが違うものに変わり始めていることに気付いていた。

皆人のセキレイが布団に潜り込むことは今に始まったわけではなく、前々からあった。
ただ、最近ではその頻度が激しさを増し、そして最初は迷惑がっていた佐橋皆人でさえも、夜中に潜り込むセキレイたちを受け入れ始めているというのが問題だった。

「はぁ……」

毎回それを注意しに美哉は皆人の部屋に行くのだが、これが間が悪いことこの上なかった。何もしてなければいいが、目の前でお互いの身体を併せて動いていたり、布団が一定の動きを繰り返していたりする様を見るのだから堪ったものではない。

「いい加減…何とかしないといけませんね」

そう呟く美哉の顔には般若のような恐さはなく、どこか火照ったような憂いを帯びた表情をしていた。頬が少し染まっていることから、それが怒りからの言葉ではないことが分かる。

「あの人が居れば……」

と口に出したが、美哉はすぐにその先をつぐんだ。